

第10回 カナダで感じた事

小話を一つ。

ある老夫婦の話です。朝の10時頃、夫が妻にアイスクリームを欲しがりました。どの種類がいいかと妻が聞くと、夫はストロベリーとの事。妻はどれくらい欲しいかを聞くと、ワンスクープで良いとの事でした。そこで、妻はグラスに入れるか、それともアイスクリームコーンに盛るかを聞くと、アイスクリームコーンに盛って欲しいとの事でした。妻はこの位の注文ならばメモを取る必要がないとの事で、そのまま台所へと行きました。そこに、丁度、電話がかかって来たのです。それは娘さんからの電話で直ぐに話は終わりました。夫はアイスクリームを待っていたのですがなかなか来ません。そこで、テーブルの上にあった新聞を読み始めたのです。しばらくして戻って来た妻は、お盆に載せた大きなお皿を出しながら『これが、サラダと卵とチーズ。そして、こちらがコーヒー』と言いました。すると、夫は『なんだ、オレの頼んだトーストがないじゃないか』と叫んだそうです。

このお話のオチはもうお判りでしょう。双方ともボケているのです。

大いに笑える小話ですが、最近、それに似たような事態が妻と私の間に時々起り始めているのです。

本当に、もう笑えなくなって来ているのです。ですから、夫婦の会話において代名詞が多く使われ始め、その上、聴力も低下して来ているのですから、意志の疎通に時間がかかるようになりました。ある時、NHKの日本語テレビで、歌の番組でしたか、イギリスの女性歌手サラ・ブライトマンが出演していた時の事でした。居間から妻が、サラ・ブライトマンが出ているよと、台所にいる私に叫びました。私はそれを歌番組なのにどうしてサラブレッド（競争馬）が出ているのかと、不思議に思いました。サラ・ブライトマンの最後のマンが聞こえず、サラブレッドに聞こえたのでした。こういう事はもういつもあります。でも、妻の方もブライトマンのマンを忘れて言わなかったかも知れませんがね。

また、若い人達には多分ピンと来ないかも知れませんが、買い物リストを書いてそれを家に忘れてしまって買い物に行ったとか、マイクロオーブン（電子レンジ）に何かを入れて取り出すことを忘れてそのまま朝まで置いたとか。体力も、知力も、記憶力も、思考力も、もうドンドン低下して行くのが老後の宿命の様な感じです。

ところで、今、その様な状況にある私ですが、まだまだ、記憶も、知力も、体力もある内にと行ってこれ（私の履歴話）を書き留める事にしたのでした。ですから、所々、可笑しい文章になっているかも知れません。その所は目をつぶって下さい。お願い申し上げます。（目をつぶって、どうして読めるか？何て言わないで下さい。）

さて、話を本題に戻しますが、私は自分の人生で多くの失敗をして来ました。その中でも、一番大きな失敗は英語にありました。何しろ、学生時代、クラスで一番英語の出来ない私が、今、こうして英語圏での生活をしているのですから、世の中は、やはり、不思議なものです。

で、それでは、英語力はどれほどかと聞かれますと、やはり、日常の生活で不便を感じない程度の英語力ですと、言えます。旅行しても英語圏であれば不便は感じません。それでは、英字新聞は読めるかと問わ

れますと、多分、私は落第でしょう。また、会話はどうかと言われるすと、会話も100%ではなく政治とか、経済とか、多分、大まかな事は理解できますが深くは理解出来ていません。

それでは、映画はどうかと言いますと、こちらも落第です。特にスラングの入ったコメディなどは理解に苦しみます。昔、アメリカのテレビでジョニー・カーソン司会のトークショーがありました。それを見て、ジョークを理解しようと試みたのですが、半分位しか理解できませんでした。

それでは、一体全体、その様な英語力でカナダでどう働いて生きて来たのかと言う疑問が残る事でしょう。ところが、そう言うレベルであっても生きて行けるのです。ただ、自分の会社を持たない限り、人の上に立てる立場にはなれませんが、生きられるのです。

元々、カナダは移民で成り立っている国です。英語とフランス語が公用語として採用されていますが、地域によってばらつきがあるのです。フランス語は東部、モントリオールとケベックを中心とする地域に多く、他の都市では市内でイタリア語、スペイン語、中国語、ヒンズー語、ドイツ語、アラビア語、韓国語等に別れているのです。で、残念ながら日本語が通じる地区はカナダには存在してないないと思います。アメリカ、カナダを通じて各地に日本人町は形成されて「リトル東京」とか言う名前が付いた地区があります。しかしながら、一般的な日系人は一か所に住む事なしにバラバラに住んでいます。ですから、地域と言うより小さなポイント、ポイントで日本語が通じると言う感じです。

日本語が通じないならば、お医者さんに行ってもどうなってしまうかと言う疑問があるでしょう。

私の経験からしますと、子供が生まれてから ずっと カナダ生まれのユダヤ人の同年配のお医者さんが私達のファミリードクターでした。家族の病気は長年、彼に診てもらっていました。そのファミリードクターの紹介で必要に応じて、色々な専門医へ回されました。長年、診てもらっていますので、会話には慣れてしまって、時折、冗談も言えるようになっていました。ところが、5年前に引退されて新しいファミリードクターを探さなければならなくなり、結局、近くに事務所を構える中国人のお医者さんを選んだのです。その事務所では息子さんもファミリードクターをしていますので、多分、お父さんが引退しても息子さんが引き継いでもらえるとの事で安心だと思い、私達のファミリードクターになってもらいました。その点、英語に不安のある方は、極力、日本語が出来る日系のファミリードクターに集中してしまいます。それは、仕方がない事でしょう。しかしながら、日本語を話せる日系人のファミリードクターは少ないので大変です。最近、そのために英語のできる通訳を派遣してその方面をカバーする会社も出てきています。個人的な事ですが、長女がこちらで看護師をしていますので、最悪の場合は通訳をしてもらいます。ですから、やはり年を取って病院へ通う事になれば、英語が話せなくてはかなりのストレスを抱える事になると思います。

さて、ついでにこちらの医療関連の事を書きましょう。

こちらは、病院は全て公共病院です。そして、医療保険は国民皆保険制度を採用しています。ですから、ある面では病気になってもお金がないとの事で心配する事はありません。しかしながら、病気になり手術となると、長い間順番を待たなければならないと言う弱点があります。それは、48年前からその様な制度でした。と言うものの、私はただ一度だけヘルニア（脱腸）の手術で一日、そして、会社で工作中、右足の怪我で手術し、二日ほど入院しただけです。白内障とか、緊急ではないガン治療とか、心臓手術とかは、3ヶ月～8ヶ月間ほど順番を待たなければならない事も多くあります。そのため、最近ではいくらお金がかからないかと言っても、待つことが出来ず、自己負担で外国の医療機関へと出かけて手術を受けるとい

うケースも増えているようです。特に多いのは、お隣のアメリカです。それこそ、待つ日数が少なくお金はかかりますが、直ぐに治療、もしくは、手術してくれるのです。また、大きな声で言えませんが、こちらにいる日系人の中にはカナダ国籍を取っても日本国籍を捨てず、そのまま、二重国籍を通して、日本の医療保険をこっそりと受けている人々もいます。カナダは二重国籍を認める制度であり、日本ではそれは認められていないのです。でも、結局、日本で虚偽の報告をして通すのでしょうか。つまり、両得と言う事でしょうか。また、国籍の問題では、カナダの国土で生まれた人には自動的にカナダ国籍を与える制度があります。それを利用して、お金のある人々はお産をこちらでして、生まれた子供にカナダ国籍を取らせて、将来、カナダに移住できるようにとする人達も後を絶ちません。アメリカでも同じような制度を維持していますので、同じ事が行われていると思います。まあ、世界には裏道がいくらでもあると言う事でしょうか。それにしても、カナダのお国柄はノンビリしていますよネ。

1980年代の頃、確か、太平洋にある小さな国から来たオヤジさん、観光ビザが切れる時、息子さんに連れられて病院に行き腎臓透析が必要とされたのです。で、病院の制度として、保険があるなしに関わらずカナダに滞在が認められ亡くなるまで治療が続いたとの事でした。そして、その治療代は税金から支払われ、その代金は今のお金で百万ドル以上との事でした。小さな国には、その頃、腎臓透析の機械がないとの事でした。

その様なお話しが、ここ、カナダには結構あるのです。信じられますか????

・・・ 次回へ ・・・